

論文の和文要旨	
論文題目	Languaging が中学生の外国語としての英語ライティングとスピーキングの文法的正確性に与える影響
氏名	牛山 真弓
<p>本研究は、Swain (2006) の主張する languaging が、日本語を母語とする中学生の英語ライティングとスピーキングにおける文法的正確性を向上させるのにどの程度有効であるか、また、どのような languaging の方法がより有効であるかを、三人称単数現在形の文法形態素-s (以下、「三単現」) に焦点を当てて、検証しようとしたものである。</p> <p>論文は全 5 章から成る。第 1 章では、日本の中学校の英語授業における課題と languaging を授業に取り入れることへの可能性を述べ、第 2 章では、focus-on-forms から focus-on-form までの第二言語習得研究に基づく英語教育の変遷を振り返りながら、languaging を英語授業の中に取り入れることの意義、本研究における languaging の定義、先行研究における languaging の有効性、フィードバックや分析方法についての考察を述べている。続く第 3 章では、2010 年と 2011 年に実施した予備研究の研究デザイン、結果と考察、第 4 章では、2013 年に実施した本研究の研究デザイン、結果と考察を述べている。そして、第 5 章の結論部分では、本研究から得られた中学校の英語授業への示唆、研究デザイン上の問題、反省点、今後の課題を述べている。</p> <p>ベネッセ教育総合研究所の中高生の英語学習、中高の英語指導に関する実態調査 (2014, 2015) によれば、授業の中で文法の説明や文法の練習問題がよく行われているにも関わらず、中学生の半数以上が「英語の文を書くのが難しい」「文法が難しい」と回答している。このようにつまづきを感じる生徒が多い要因として、「目的・場面・状況」を伴った文法指導が行われていなかったことや、英語の授業で、生徒が英文を書いたり、書いた英文に対して教員がフィードバックをしたりすることが質的・量的に十分に行われていなかったことが考えられる。</p> <p>このことから、生徒に「英文が書けるようになった」という自信と達成感を与えるライティング活動のあり方と、ライティングを通して生徒が文法的正確性を高めるための教員のより適切な指導法やフィードバックのあり方を、第二言語習得理論研究の考えに基づき探ろうと考えた。具体的には、ライティング活動後のフィードバックの際に languaging を取り入れれば、生徒が自身の文法的間違いを振り返り、修正することができるのではないか、さらには、文法規則の理解を促進したり、正確性を保持したりすることができるのではないかと考え、研究計画を立て実施した。また、スピーキングにおける languaging の効果の違いについて検証を行うために、2 回目の予備研究と本研究では、スピーキングにおいても効果の検証を行うことにした。本研究の参加者は、日本の公立中学校 1 年生 53 名で、定着に時間がかかるといわれている三単現を対象文法項目とした。</p> <p>手順としては、まず、事前学習として、生徒が languaging の際にメタ言語的説明ができるよう一人称の文と三人称の文を示し、気付きを促した。事前テストは 4 カ月の期間</p>	

をおいた後に行い、生徒に「私の家族」をテーマに英作文を書いてもらった。さらに、同テーマでスピーキングテストも行った。テスト後、グループを2つに分け、27名の生徒 (languaging group) の作文には、エラー箇所が分かるよう、三単現に関わる箇所に下線を引き、もう一方の26名の生徒 (direct correction group) の作文には、教員による明示的な修正を行った。3日後、それぞれのグループに作文を返却し、languaging group の生徒にはペアで対話をしたり、気がついたことを書いたりしながらエラー箇所を修正するよう伝え、direct correction group の生徒には各自、黙って修正箇所を確認するよう伝えた。languaging group の対話はICレコーダーに録音した。10日後の事後テストは、事前テストと同じテーマ、同じ時間制限で作文を書き、スピーキングテストも行った。さらに、長期的な効果を検証するため、1カ月後と8カ月後に行われた確認テストから三単現に関わる問題の解答のみを取り出し、分析データとした。英作文で得られたデータ、スピーキングテストで得られたデータは文字化し、事前・事後テストの正答数は obligatory occasion analysis によって、type count と token count で分析、平均値の差を比較した。

Wilcoxon signed-rank test による分析の結果、languaging group, direct correction group とともにライティングの正確性において事前テストと事後テストの間に有意差が見られた。また、Mann-Whitney の U 検定で両グループ間の検証をしたところ、有意差は見られなかった。

さらに、languaging の方法による効果の違いを検証するために、languaging group で使用された languaging のタイプを (1) スピーキングとライティングでメタ言語を使用した MSW グループ (2) スピーキングでのメタ言語を使用した MS グループ (3) ライティングでのメタ言語を使用した MW グループ (4) 自力では修正ができず、ペアのメタ言語を繰り返し、メモをとった RW グループ (5) ペアのメタ言語を繰り返した R グループ (6) 黙ってペアのメタ言語を聞いていた Z グループと6つのグループに分け、事前・事後テストの正答数における平均値の差を比較した。

分析の結果、MSW の正答率の変化が最も高く、direct correction group の正答率の変化をはるかに上回った。次いで大きな変化が見られたのは RW で、R, MS に属する生徒は結果にばらつきが見られた。MS に属する生徒の多くは、languaging でのエラー修正率は100%であったにも関わらず、ライティングでは、三単現が抜け落ちている、または事前テストでは正確に使用できていても、事後テストでは正確に使用できていないという結果であった。

スピーキングテストは、languaging group 21名、direct correction group 25名のデータを分析した。データは、英語話者によって文字化され、obligatory occasion analysis によって、type count と token count で分析し、事前テストと事後テストの正答数における平均値の差を検証した。

ライティングテストと同様、Wilcoxon signed-rank test では、languaging group, direct correction group とともにスピーキングの正確性において事前テストと事後テストの間に

有意差が見られた。また、Mann-Whitney の U 検定では、両グループ間に有意差は見られなかった。

languageing group の使用した languageing におけるタイプ別分析で、ライティングテストの分析結果と異なったのは MS に属する生徒の結果であった。ライティングでは、事前・事後テストともに正答率が 0% であった生徒が、スピーキングでは、全文ではないにしろ、三単現を正確に使用できていた。その要因を探るために MS に属する生徒の発話内容を分析したところ、スピーキングでは、生徒が教科書で頻出の動詞を繰り返し使用していることが分かった。さらに、スピーキングでは三単現を使用できていた生徒がライティングでは be 動詞を過剰使用していることが分かった。このことから、三単現の概念理解が不十分である生徒にとっては、ライティングの振り返りの時間がむしろ弊害となり、考えすぎた結果、過剰使用してしまったのではないか、または、ライティングとスピーキングにおける三単現の習得の発達段階：(1) 正確に使用できない段階、(2) 動詞に-s はついているが be 動詞や助動詞と一緒に使用している段階、(3) スペリングミスや語尾の変化ミスが残っている段階、(4) 正確に使用できる段階、が異なっている可能性があることが見えてきた。

以上の検証結果から、以下の教育的示唆が見出された。(1) languageing は教員による明示的なエラー修正と匹敵する効果があると示されたことから、教員中心の文法指導ではなく、学習者中心の文法学習の効果の可能性が示唆された。(2) languageing において、ペアの発話を聞くことによる波及効果があったことから、学習者の協働的な学びの有効性が実証され、学習者の効果的なペアリングのあり方についても示唆が得られた。(3) 定着に時間がかかる文法項目の学習において、学習者が languageing によるエラー修正の有効性を知れば、それを家庭学習でも生かすことができ、自律的学習者を支援することができる。(4) languageing のデータから、生徒が be 動詞と一般動詞の役割の違いについて理解することで、三単現の概念の理解が深まることが見えた。

しかし、本研究では対象文法項目が三単現に限られていたことから、今後、他の文法構造も調査する必要がある。また、生徒の三単現の使用状態についてさらに細かく質的分析をすることで、ライティングとスピーキングにおける三単現の発達の違いや、どの発達段階の生徒に対して languageing を行うことが有効であるかということも見えてくる可能性がある。教育的配慮から、完全統制群との比較ではなかったこと、languageing group がペアによるエラー修正であったのに対し、direct correction group は個人でエラー確認を行ったため、ペア対個人の比較であったこと、データのサンプル数が少なかったことも本研究の課題である。

今後の実証研究では、以上の反省点を踏まえ、分析方法を細分化し、さらなる質的分析、否定文や他の文法構造での検証、教員による明示的な修正を行わない完全統制群との比較、さらにタスク活動などの言語活動と合わせて languageing を行う中で、どの程度対象文法項目を正確に使用できるようになるかについての実証研究を行いたい。